ISSN 0289−4130

設立30周年記念

研究紀要

第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

絡条体圧痕文の付く野島式土器　金子直行
−早期後葉における絡条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について−

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味　細田　勝

加曽利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係　上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（I）　小野美代子

荒川流域出土の大廓式土器について　栗岡　潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡　福田　聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について　瀧瀬芳之
−埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）−

国界地域の土器流通　赤熊浩一
−下総国と武蔵国の様相−

地震で沈んだ倉と古代の集落　田中広明

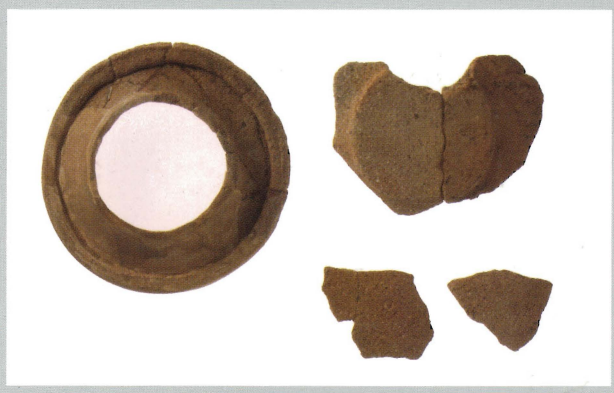
2011

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

口絵 1

1　白井沼遺跡出土大廓式土器

2　大型壺口縁部（白井沼）



3　複合口縁壺（白井沼）

4　鍛冶屋・新田口遺跡（非掲載）

5　大型壺口縁部（川合遺跡）

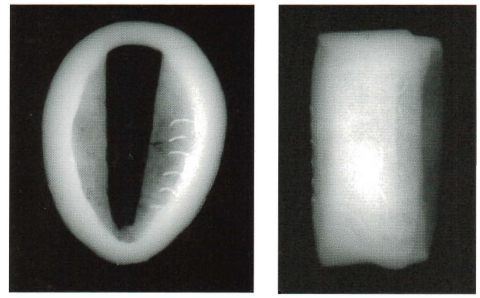
6　大型壺口縁部（川合遺跡）

7　大型壺口縁部（川合遺跡）

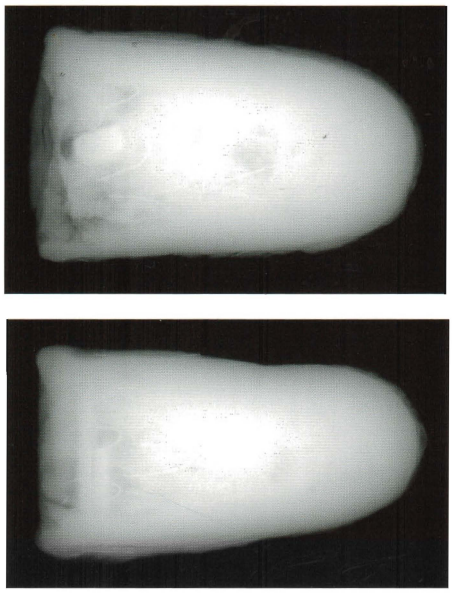
8　大型壺口縁部（川合遺跡）

瀧瀬論文　X線透過写真

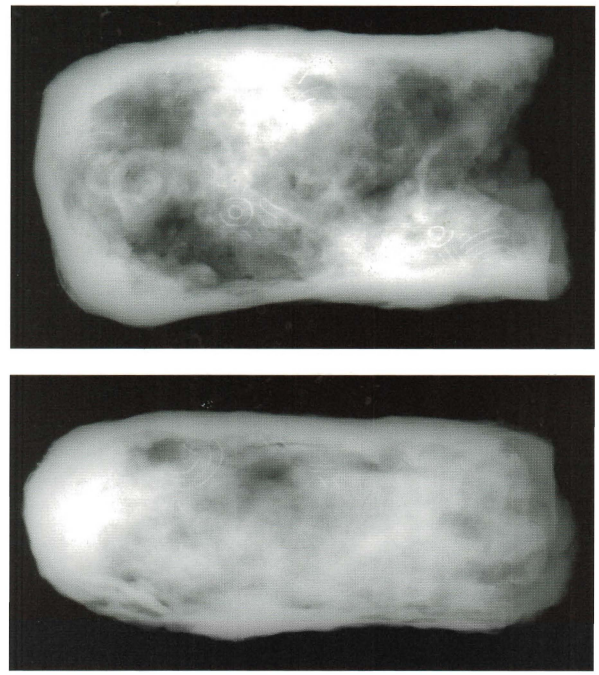
SPM88-041-12



SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味

細田　勝

要旨　関山式から黒浜式にかけて、関東地方から東北地方南部から新潟方面あるいは中部、甲信地域を眺めると、関山Ⅱ式の中頃に、北～中信地域と東北地方南部との間に緊密な関係が存在したことが明らかとなった。これに対して、関東地方奥東京湾の沿岸地域や、旧利根川や渡良瀬川にはさまれた大宮台地に位置する遺跡群では、それらの地域とは距離を置き、専ら伝統を堅持する方向性を選択したらしい。しかし、この地域では、関山式の伝統が廃れる事態に直面し、東北地方南部や北関東、甲・信地域からの系統を取り入れることにより、新たに独自の土器を生成した。このような動きは、逆に周辺の地域に波及し、その結果、地域間の枠組みが解体・再編され、やがては関東から甲・信地域に広がる諸磯式を生み出す原動力となった。

はじめに

筆者は以前に縄文時代前期中葉の関山式から黒浜式土器の変遷について考えたことがある（細田1990、2000、2006）。筆者がフィールドとする埼玉県を中心に関東地方を眺めると、関山Ⅱ式期と黒浜式中葉期に土器の系統関係が大きく変わるのではないかとの疑念が生じた。はたして、土器の系統性の背後にはどのような問題が横たわっているのだろうか。なぜ、他地域の系統を取り入れるのだろうか。今回、関山式後半から黒浜式土器を通時的に眺め、改めて上記の問題について考えてみたいと思う。

1　関山Ⅱ式から黒浜式古段階の系統

関山式については、黒坂禎二氏（黒坂1984、1987）や谷藤保彦氏の研究（谷藤1988、2002）がある。細別段階の呼称等に差はあるものの、変遷観や各段階の特徴については大方の認識が定着していると考える。本章では、特に関山Ⅱ式から黒浜式の古い部分をまず取り上げてみたい。黒浜式土器の細分については、新井和之氏の先駆的な業績（新井1982）があり、それを批判的に継承・整理した奥野麦生氏（奥野1989）や筆者（細田1989）、小宮雪晴氏（小宮1996）の研究がある。

特に奥野氏は黒浜式を３段階に区分し、各段階の特徴を整理しており、後に続く黒浜式土器研究の骨格を作成したといえよう。

金子直行氏は、中部・北関東に分布する大形菱形文系土器について取り上げ、型式や地域を超えた検討を行った。また、大形菱形文の由来を東北地方に求めるなど、地域を横断した広域な検討を行い、黒浜式との構造的な差異を明らかにした（金子1989）。田中和之氏は、黒浜式後葉に出現するいわゆる「米」字文や「ユニオンジャック文」と呼称される土器を対象に（田中1990）、北関東と対比する中で東関東の地域性を浮き彫りにした。今回筆者が検討する課題も、上記各氏の業績に立脚しているものであることは論をまたない。

2006年に開催された縄文セミナー「前期前葉の再検討」で、筆者は関山Ⅱ式に関して口頭発表を行った（細田2006）。中部地方については、贄田明氏が（贄田2006）、南東北については堀江格氏が（堀江2006）発表するとともに、新たな資料についての提示もあった。このような状況を踏まえ、関山Ⅱ式以降の土器について地域横断的に再考し、関東とその周辺地域の様相を把握し直してみたいと考える。

黒坂氏は、貝崎貝塚の分析を踏まえ、二ツ木式

を３段階、関山Ⅰ式を２段階と捉えている（黒坂2006）。関山Ⅱ式については３段階の変遷を考え、最終段階に井沼方段階を設定した。井沼方段階に後続して黒浜式のもっとも古い段階が位置することは編年学的にも周知の事実であり、系統的な変遷が辿れることも、宿上貝塚の検討（奥野他1987）などで確認されている。しかし眼を関東周辺に広げると、この点をめぐっての齟齬が存在することも事実であろう。問題は大形菱形文系の出現と関山Ⅱ式終末－井沼方段階－をめぐる編年的な対比関係にあるのであろう（註１）。

ところで、関山Ⅱ式を取り巻く周辺の状況は如何であろうか。以下ではこの点について考えてみたい。

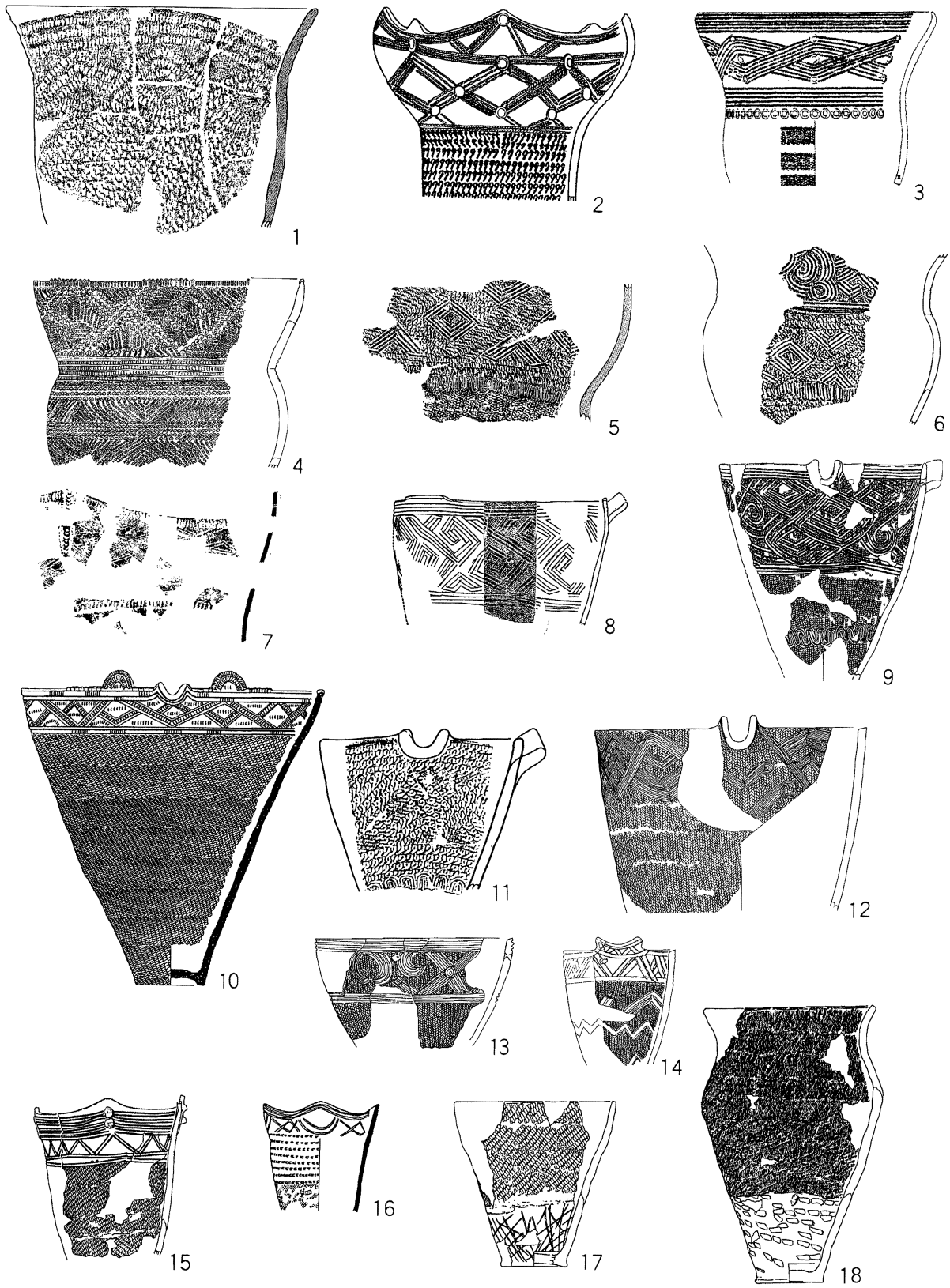
関山Ⅱ式については、古段階に貝崎貝塚Ａ－８号住居跡、飛鳥山遺跡SI－76号住居跡を、中段階に貝崎貝塚Ａ－９号住居跡、後山遺跡２号・４号住居跡を、新段階に井沼方遺跡を位置付けている。この変遷については概ね首肯されるものと筆者は考えるが（註２）、貝崎貝塚は、関山Ⅱ式以降良好な組成に恵まれていない。古段階はモチーフに関山Ⅰ式要素を残しつつも、器種に片口注口土器や、地文に組紐が出現するなど新たな要素が認められる。中段階は組紐盛行期にあたるとともに、文様では半截竹管状工具による鋸歯文に加えて、本来は鋸歯文の波頂部に施文される半円形ないしは山形のモチーフが大型化し、口縁部文様帯の区画線に接するように描かれることで、菱形を構成する文様が顕現してくる。このような特徴をもつ関山Ⅱ式は、いわば奥東京湾沿岸地域を代表する土器群なのであろう。一方、このような土器とは異なり、ループを多層に重ねることによって多単位の菱形文を描く土器がある。施文手法を異にしており、奥東京湾沿岸地域とは明らかに趣を異にする土器が存在する。以下ではこの種の土器について考えてみたい。

１）交差多単位菱形文

第１図４～６が多層ループ文で鋸歯文が描かれた土器の一例である。５は口縁部に斜めクランク状にループ文を施文し、それを横にずらすことで鋸歯状文を描き出すことを特徴としている。以下ではこれを交差菱形文と仮称しておきたい。同図６の宮西遺跡例は、口縁部には組紐地文上に渦巻文や蕨手文などの沈線文を施文し、胴部には５と同様の文様が描かれている。口縁部文様の詳細は不明瞭ながら、例えば第２図10の羽根尾貝塚例と同様の関山式の典型的なモチーフに連なるものとみて差し支えないであろう。一方、第１図４の草山遺跡例は５・６とは様相が異なり、ループ文によって交差菱形文を描く手法に共通性はあるものの、ループ文の一端を屈曲させることで、同図８のような蕨手状のモチーフを描き出している。また、ループ文で描かれた空白部への三角や菱形の沈線文も施文されず、地文に組紐も用いられないなどの相違も認められる。

奥東京湾沿岸地域では、関山Ⅱ式の中葉頃から、第１図10のように、連続鋸歯文に付加文を組み合わせて菱形状の文様を描く土器が目立ってくるが、第１図４～６のような描出手法を異にする土器が出現する背景と、奥東京湾沿岸地域での関山式に見られる菱形構成との接点はどこにあるのだろうか。

ここで眼を東北地方南部に転じてみよう。第１図１～３は半截竹管や櫛状工具で文様が描かれた土器である。特に２の宮田貝塚例は、中部から関東地方北部で大形菱形文の成立に深く関与したと評価されている（金子1989）土器である。器形は１の越田和遺跡（香川ほか1996）例、３の南太閤山Ⅱ遺跡（山本1986）例は口縁が外反する平縁深鉢、２は４単位波状で、内湾気味に開く口縁部を持ち、波底部に山形状の小突起をもつ深鉢で、口縁部の表裏で文様を異にする例でもあるが、波頂部下を水平に区画し平縁の文様を施文している点に注目したい。これらの文様は、東北地



第1図　菱形文の系譜（1）

方南部から新潟方面では系統的なつながりが確認でき、特に新潟県二軒茶屋遺跡（斉藤2006）例に見るように、横S字文を連鎖させる文様構成に連なることは明らかである（註３）。恐らく、関山式に見られる多層ループ文による交差菱形文は、刺突文列をループ文に置き換えたものであろう。東北地方南部でも、ループ文による施文例は獅子内遺跡（鈴鹿ほか1997）で多くの出土例が報告されており、第１図５と酷似した資料が越田和遺跡（福島1996）から出土しているなど、東北地方南部からの影響関係を考慮したほうが合理的であろう（註４）。

以上の点から改めて同図４～６を評価すると、４は施文の一端が蕨手状になるなど、関山式の特に沈線文に多用されるモチーフを意識した構成になっている部分があること、５・６は、沈線文を文様空白部に施文することで、沈線文を重視する関山式の構成に近い部分を持っているなど、基本モチーフには東北地方南部との共通性とともに、関山式にも共通する要素を備えていることに注目したい。

ところで、第１図３は富山県南太閤山遺跡出土例であり、酷似した資料が長野県木曽郡王滝村田中洞遺跡（神村1988）でも出土しており、信州では神ノ木式とされている。後述する資料からも明らかなように、神ノ木式には東北地方南部と共通する文様構成をもつ土器が組成の一角を占めていることになる（註５）。

神ノ木式には第１図７の中越遺跡（友野1979）２号住居跡出土例のように、口縁部文様帯の交差施文の間隔を密にすることで、結果的に空白部にあたる菱形構成が横一列ではなく、斜め方向にも描かれるような構成が存在する。このような構成は東北地方南部には見られないものであり、中部地方に独特の構成らしい。一方、関山式土器には第１図８の幸田貝塚414号住居跡例のように、文様帯区画線に接する鋸歯文と菱形で端部が蕨手状の沈線文が横位や斜位に描かれ、なおかつ鋸歯文や菱形文が連結される文様が存在する。関山式は沈線文を文様描出の基本とするが、菱形や鋸歯状の沈線文については、神ノ木式や東北地方南部に見られる竹管文や櫛歯状工具によるモチーフの空白部つまりは地の部分に相当するようである。恐らく第１図５・６の沈線文と共通した出自をもつものであろう。第１図８は口唇上の突起が板状となっていること、同図９はモチーフに崩れがみられること等から、同図４～６と比較すると後出的な様相を帯びているが、このようにみると、東北地方南部の土器と共通性を持つ部分と中部地方に特徴的とみられる部分双方が関山式の文様構成に影響を与えているとみなされるのである。

第１図10は関東での関山Ⅱ式中葉の典型的な文様構成である。これを多層ループ文で表現したものに11の幸田貝塚455号住居跡（石田ほか1975）例があるが、12の井沼方遺跡（青木ほか1981）５区１住例に代表されるように、関山式終末期に至るも堅持される伝統的な文様の一つである。

２）４単位鋸歯文

本節で取り上げる４単位菱形構成の土器は、４単位波状口縁を基本形とし、口縁部に鋸歯文を４単位に配置した土器である。波頂部を頂点として鋸歯文を描く例が多いが、波頂部の反対方向へ鋸歯文を配置することで菱形文の効果を図る土器も存在する。第２図１の山形県松原遺跡（秦1977）例と２の宮田貝塚（竹島ほか1975）例は、口縁部文様の系譜を見る上で興味深い資料である。松原例には、鋸歯文頂部に付加文を描き、第１図10の口縁部文様に見られるように、関山式文様構成に近いが、２の宮田貝塚例は、付加文が縮小し、あたかも鋸歯文のみで文様を描き出すかのような印象を与える土器で、鋸歯文の成立に関して示唆的である。

先に多単位菱形文における東北地方南部と中部地方の土器の類似性について触れたが、この種の

土器についても神ノ木式に類似した土器が認められる。第２図３の野村遺跡（千田ほか2001）例は、波頂部が双頭状で、波底部には台状の突起を有している。文様は櫛歯状工具による刺突文と条線で、波頂部を頂点とした密な鋸歯状の文様が描かれている。口唇部に列点状刺突文が廻ることから、同図２の宮田貝塚例にみられる口唇部と相同の関係にあるようだが、文様描出手法は関山式とも異なっている。

この種の文様構成は東北地方南部から中部地方へ、更には、第２図４・５の例に見られるように関東地方にも波及する。４の若葉台遺跡（原田1986）例は半截竹管による刺突、５の三枚町遺跡（戸田1988）例は櫛歯状工具による刺突で文様が描かれており、特に５は施文工具からみると神ノ木式に近いものといえよう。三枚町遺跡例は、戸田哲也氏により草山遺跡（柳川1976）、羽根尾貝塚（戸田2003）３Ｃ区１号貝層出土土器に後続する編年的位置付けが与えられている（戸田2007）。筆者は羽根尾貝塚３Ｃ区１号貝層出土土器を関山Ⅱ式中葉から後葉に、三枚町遺跡例を関山Ⅱ式後葉に位置付けている。これは、三枚町遺跡Ｊ１号住居跡で出土したいわゆる相互刺突文土器を、関山Ⅱ式終末期に位置付けていることによる（細田2006）。同住居跡から出土した上ノ坊式土器も、大凡関山式後葉と捉えているが、この点については後述したい。

第２図６は井沼方遺跡（小倉1982）７号住居跡出土土器で、多層ループ文で４単位の鋸歯文が描かれた事例である。奥東京湾沿岸地域の関山Ⅱ式後葉の土器は、片口注口土器を主な器種とし、第１図12～13のような多単位鋸歯文と付加文による菱形構成や鋸歯文のみの文様に収斂し、第２図６のような４単位鋸歯文は、他からの系統を考えねばならないだろう。

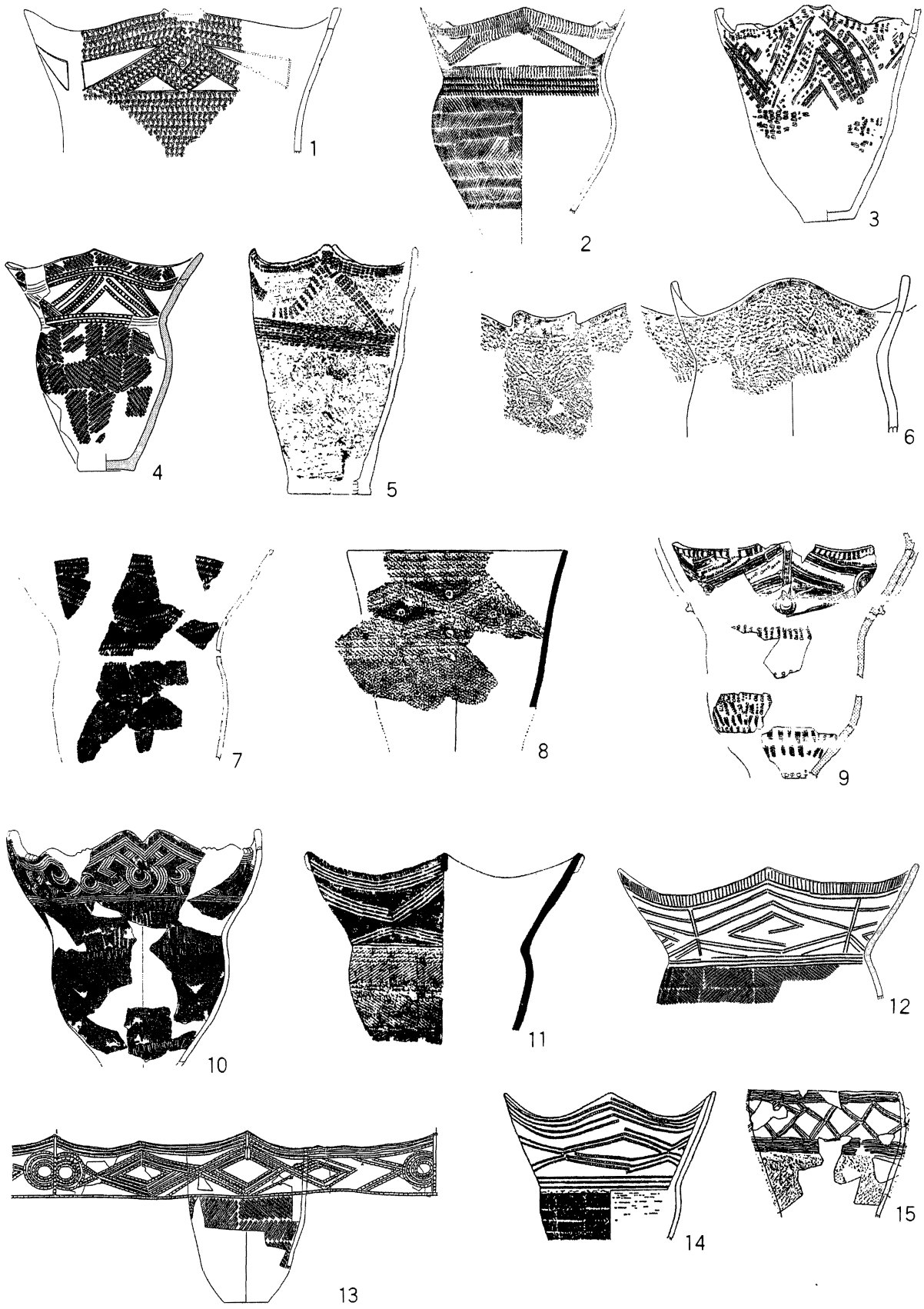
３）対向菱形文

ここであげた対向菱形文とは、主に口縁部文様帯内に鋸歯文を上下対向で描くことにより菱形モチーフを構成したものである。このなかには第２図７・11～12のように４単位構成をとるものや、同図８のように多単位構成の可能性があるものを含んでいる。いずれも菱形文の描出を意図しており、一見すると第１図に挙げた交差多単位菱形文とよく似ているが、文様描出手法を異にしている。７の地蔵田Ｂ遺跡（安田1983）７号土壙例と８の船入島遺跡（角田1983）例とをみると、施文具は異なるが施文手法が共通することから、刺突文とループ文が置換関係にあることがわかる。９の城之腰遺跡（贄田2007）1号住居跡例は、波頂部から垂下する隆帯によって器面が４単位に区画されるが、隆帯を境に口唇直下と隆帯下からの条線により菱形が描かれていると推定される。

羽根尾貝塚３Ｃ区１号貝層からは興味深い資料が出土している。第２図10は波頂部が双頭状となる４単位大波状口縁で、波底部に山形の小突起を有する。胴部に多層ループ文による対向菱形文が施文されており、口縁部には関山式独特の文様が施文されているが、波状口縁とすることで器形状の類似性を狙っているようにも見られる。しかしながら奥東京湾沿岸地域の関山式土器には、口縁部に対向菱形文が施文される例を寡聞にして知らない。

同図11～12は、対向施文により文様が描かれる広義の有尾式土器（註６）である。11は上ノ坊遺跡（河邉ほか1939）、12は三後沢遺跡（菊池1986）出土例である。11例は沈線で、12例は刺突で文様が描かれ、特に12例の波頂部下には、第１図14の南大塚遺跡（奥野ほか1990）１号住居跡出土例と酷似した蕨手文が描かれる。また波底部には口唇直下から垂下する刺突により器面が縦区画されているが、恐らく中越式や神ノ木式にみられる口縁部隆帯に起源をもつものであろう。

このようにみると、奥東京湾沿岸地域の関山式は、基本的な文様構成は関山Ⅰ式以来の多単位鋸



第２図　菱形文の系譜（２）

歯文を堅持し、沈線文で文様を描くことを伝統としている。また、交差多単位菱形構成を採用する際には、神ノ木式の特徴とされる櫛歯状工具や密接した施文を用いず、ループで文様を描き、加えて地の部分に沈線を多用するなどの関山色を加味することで、神ノ木式との差異化を図る方向に向かっている。ループを多用する傾向は東北地方南部とも共通性が強いようにも思われる。一方、関山式後葉に出現する有尾式土器の文様には、波状口縁とともに、４単位を基本とする鋸歯文や対向菱形文が堅持されており、半截竹管による刺突文とともに櫛歯状工具による刺突文も用いられていることから、神ノ木式からの系統的変遷をたどれる部分が極めて多いことは明らかである。しかしながら、第２図３の神ノ木式にみられるように、櫛歯状工具による連続刺突文や条線を組み合わせ、空白部を残さないように密に施文する、一見すると異条斜縄文を思わせる文様描出手法は、急速に衰退し形骸化し、有尾式に至ると、神ノ木式の一方の基本的な文様描出手法であり、東北地方南部とも関係性が深い第２図９のような、基本的な図形で文様を完成させる方向に収斂している。この点は、関山式が文様の一部にのみ東北地方南部との関連性を窺わせることとは様相を異にしている。伝統を堅持する方向に収斂する奥東京湾沿岸地域に対し、既に関山Ⅱ式中葉に、信州方面では東北地方南部との関係が強まっており、その状況下で神ノ木式が生み出されると、それに反比例するように関山Ⅱ式との関係が薄れていき、関山Ⅱ式後葉では、有尾式と関山式が分布域を異にするとともに、両者の遺跡・遺構内での共伴関係はほとんどといってよいほど認められなくなる。

このような傾向は黒浜式古段階に至っても顕著である。第１図15～18は黒浜式前葉の土器で、15・16は同図13・14に見られる関山式からの系統を辿れる文様が描かれた土器である。既に関山Ⅱ式後葉期には、有文土器に対して無文土器が凌駕する傾向が顕著であったが、奥東京湾沿岸地域では、黒浜式前葉でも口縁部に関山式系統の文様が描かれた有文土器は非常に少なく、第１図16～18のような追加整形施文法により、格子目文や刺突文、貝殻背圧痕文が施文された土器や、地文のみの土器が多い。口縁部に関山式系統の文様を施文する伝統が急速に衰退する傾向が明らかで、次期の黒浜式中葉にはその姿を消しているようである。いわば伝統的な有文土器が不在となる状況が生じるわけである。

それでは、黒浜式前葉の有尾式はどのような状況なのであろうか。第２図13～15は有尾式中葉の土器で、第１図15～18に掲げた黒浜式前葉にほぼ並行すると考えられる資料の一例である。14は同図11の上ノ坊遺跡例に連なり、神ノ木式以来の４単位の対向菱形文が施文された有尾遺跡（神田1953）例である。13の南大塚遺跡１号住居跡出土例は変則的な文様構成の土器で、関山Ⅱ式中葉に顕著な鋸歯文と付加文を組み合わせた文様の系統を持ち、一端が菱形の閉塞する、例えば第１図８・９のような関山式に見られる文様に類似している。また、口縁部に垂下する隆帯の両側に描かれた円形の文様や矢羽根状の文様などを見ると、第２図９に示した神ノ木式とも関連する部分がある。15は中矢下遺跡（金子1986）例で、対向菱形文であるが多単位構成である。文様は異なるが、第１図14・15の関山式から黒浜式の系統とも関連するものと考えられる。このように、４単位の対向菱形文に代表される有尾式土器にも、黒浜式と関連する部分や、神ノ木式からの系譜を有する部分があることは明らかである。黒浜式では、地文が関山式に盛行した組紐や異条斜縄文から単節や無節縄文、附加条縄文へと変化している。地文の変化は、有尾式が東北地方南部からの影響下に、例えば第１図４等の縄文施文を選択し地文の縄文化や羽状構成が定着し、この影響が関山式終末期から黒浜式初頭期に組紐からの脱却を促し

たとも言えよう。

黒浜式土器では、関山系の有文土器が急速に衰退する半面、有尾式土器は、後述するように黒浜式中葉にも一定程度の割合で有文土器が存続するが、文様細部に厳密さが失われつつある感は否めない。このように、伝統的な土器が衰退しあるいは消えていく中で、その空白を埋めるべくどのような土器を新たに生み出していったのだろうか(註7)。

2　伝統の衰退と新たな対応

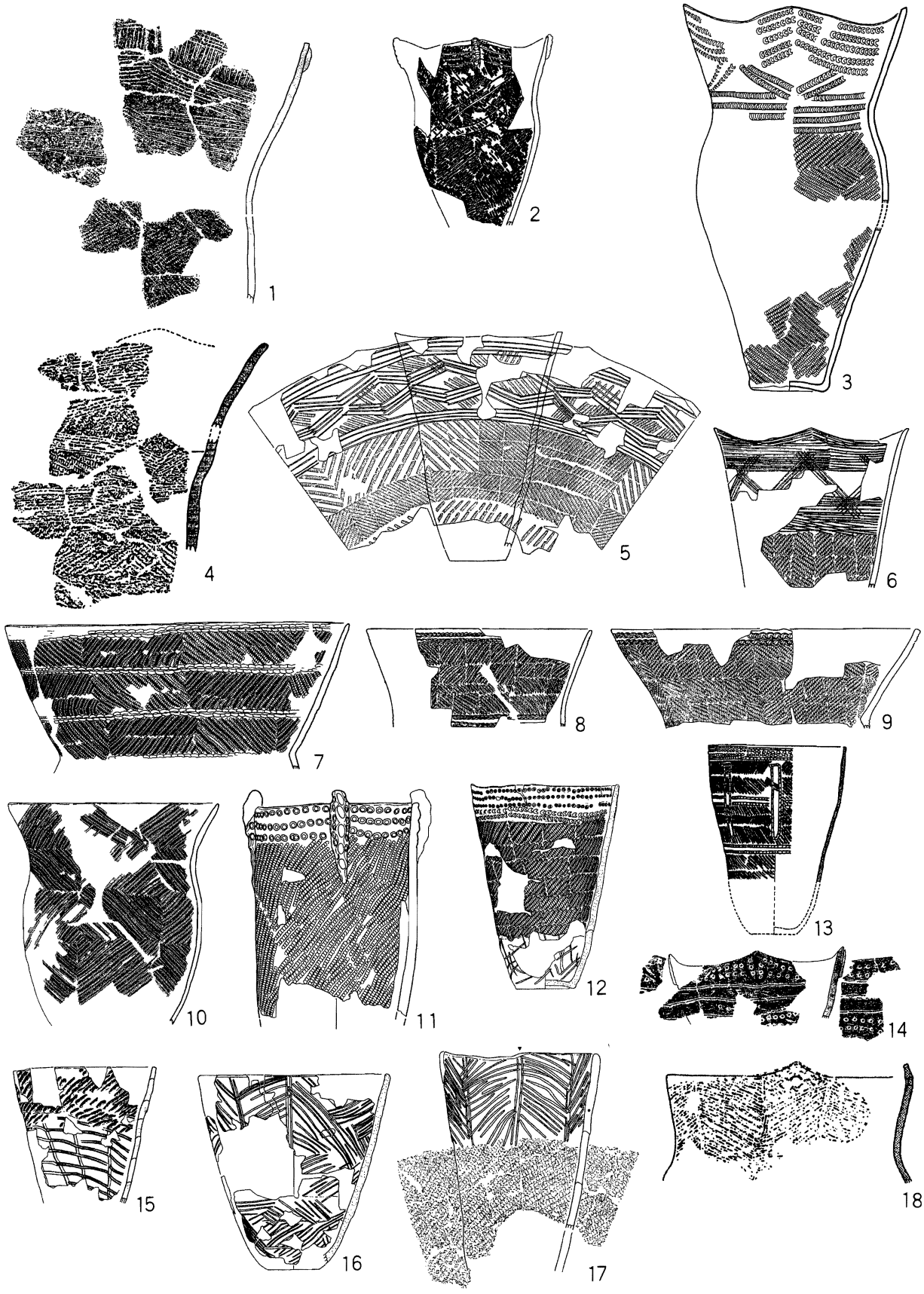
1）周辺地域の様相

前章で触れたように、関東地方は奥東京湾沿岸のいわゆる貝塚地帯に形成された遺跡と、それを取り巻くように位置する甲州・信州地域の遺跡群とで、専ら用いられる土器群に系統的な相違が認められることが明らかとなった。特に信州方面では、関山Ⅱ式期においては、在地の中越式土器に加えて、関山式や東北地方南部の土器をアレンジした有文土器が用いられている。とりわけこの地域は、東北地方南部との関係が強い半面、関東地方沿岸部との関係が比較的薄い地理的環境に置かれており、このことが神ノ木式や有尾式の成立と展開に関与していたとみられる（註8）。

一方、奥東京湾沿岸地域では、関山式系統の文様の衰退にともない、有文土器が欠如し粗製土器のみが目立つような状況が生じた。新たに有文土器を生みだすにあたり、この地域ではどのような対応を図ったのだろうか。またそれに対して周辺地域ではどのように対応していったのだろうか。本章では、主に黒浜式中葉の土器群をもとに、この問題について考察してみたい。

黒浜式中葉の奥東京湾沿岸地域と甲州・信州から群馬県の赤城山周辺から外秩父一帯および関東地方西部（以下周辺地域と仮称）にかけて、土器群に大きな相違が認められている。まず、周辺地域の状況について簡単に触れておきたい。関山Ⅱ式中葉で、主に東北地方南部との関係から生み出された神ノ木式を母体とする有尾式は、黒浜式中葉でも土器組成において一定の位置を保ってはいる。一例として長野県では第３図１の松原遺跡（上田1998）例、４の阿久遺跡（百瀬1982）49号住居跡例、北関東から関東西部では３の中棚遺跡(富沢1985) NJ12号住居跡例、４の三ヶ尻林（２）遺跡(昼間1984) ９号住居跡例、５の三ヶ尻林(２)遺跡８号住居跡例を提示した。１・４・５は対向菱形文、３・６は鋸歯文である。５・６は、関山式の多単位構成の伝統を持っている第１図15の宿上貝塚例に端を発し、それらとの交渉関係で生み出された第２図15の中矢下遺跡例に連なるようである。第３図１・３・５などの資料をみると、４単位波状口縁であることや、対向施文により波頂部を頂点に４単位の菱形文様を描くことなどの施文原理は保っているものの、長胴化した器形や沈線を主とした文様描出、粗い竹管文施文などをみると、第２図11・12などの、整然とした初期の様相からは施文の厳密さや精緻さが失われ、文様が形骸化しているとも言えよう。同図２は、口唇部に同図１の松原遺跡例のような隆帯が貼付されており、口唇下から胴部にかけて菱形モチーフが施文されている。口縁部文様帯区画をもたないが、大形菱形文の系譜に連なるもので、近似した資料が羽根尾貝塚や天神前遺跡（田中1991）から出土している。

このような終末期ともいえる様相の土器が遺構内で一定程度存在する一方で、第３図７の中棚遺跡例や同図８・９の三ヶ尻林(２)遺跡例のように、附加条ないしは単節原体を用い羽状縄文が施文されるとともに、口唇部と胴部とを区画した土器の割合が高まってくる。特に中棚遺跡例は特異な土器で、条の方向が変わる部位に半截竹管によるコンパス文が施文されている。コンパス文は口唇部や口頸部などを区画する際に用いられる場合が一般的で、通常は口縁内部に施文される例はないよ



第3図　コンパス文・小波状文の伴出土器

うである。中棚遺跡例は、一例として挙げた第４図18や20などの、コンパス文・小波状文系土器との併施文例とも言えるのではないだろうか。奥東京湾沿岸地域では、口唇部や頸部に区画を持たず、器面全面に羽状縄文が施文される土器や、コンパス文・小波状文系土器が存在しており、北関東から西関東方面とは対照的な様相を示している。

２）奥東京湾沿岸地域の様相

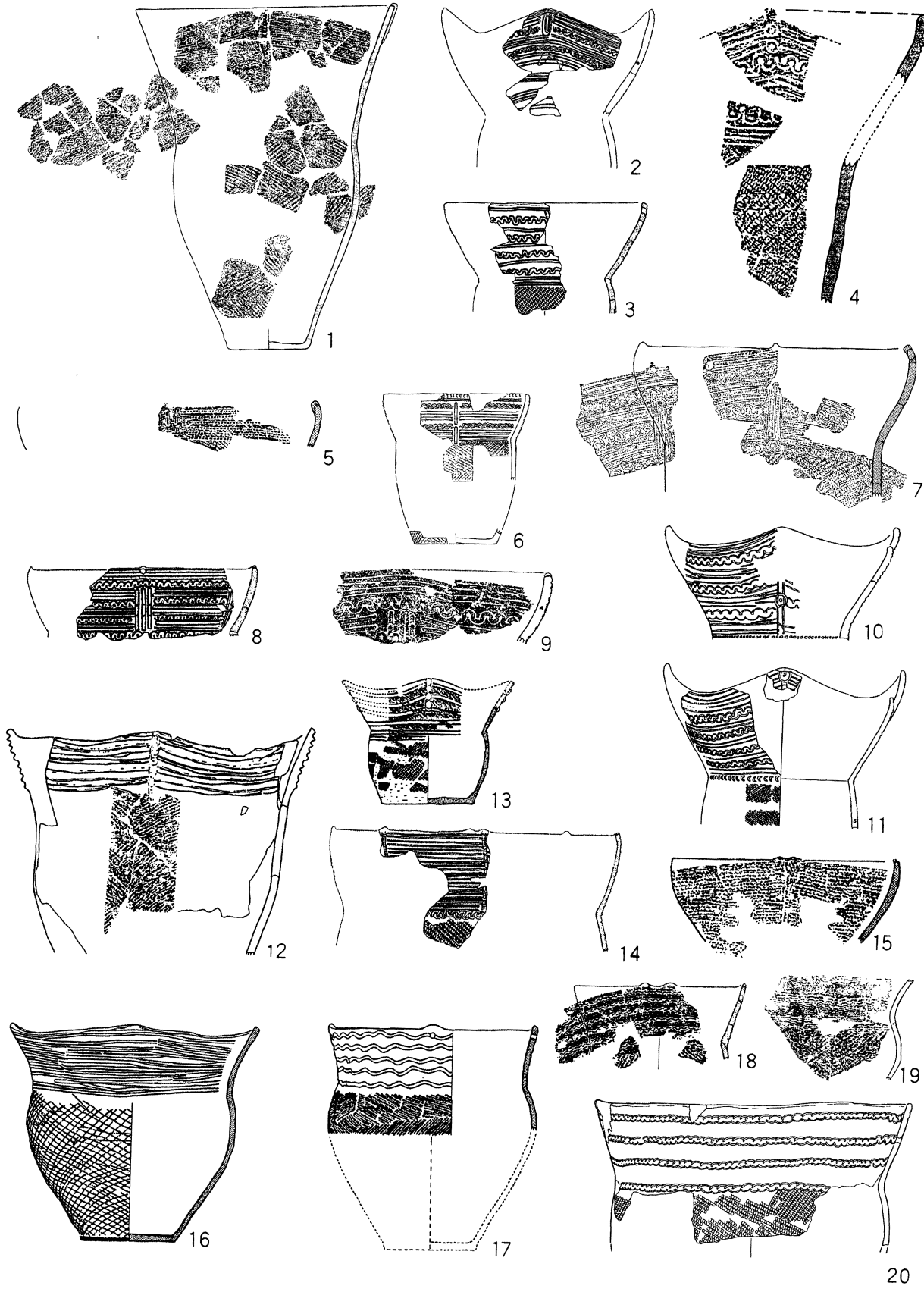
周辺地域とりわけ北関東一帯と比較して、奥東京湾沿岸地域はどのような土器が存在するのであろうか。この地域では関山Ⅱ式後葉を経て黒浜式前葉頃まで、有文土器に関山Ⅱ式系統の文様が用いられる伝統が残っていたと考えられるが、土器組成中に占める有文土器の比率は必ずしも多くはなく、縄文施文の粗製的な土器が主体であった。

黒浜式中葉頃には関山系の文様は姿を消しており、伝統的な有文土器が不在の状況が生じたようである。その空白を埋めるように、新たな有文土器が出現した時期がこの地域の黒浜式中葉の様相であろう。では、その土器とは一体どのような土器なのであろうか。

第４図に奥東京湾沿岸を主体に、周辺地域を含む黒浜式中葉と考えられる土器を示した。これらの土器は、従来コンパス文・小波状文系土器と呼称されているものだが、細部にはいくつかの特徴がある。それらについてここで簡単に触れてみたい。

第４図１は松原遺跡SQ8002出土例である。口唇部のやや幅広い条線帯に垂下隆帯が貼付され、口縁部に６条の小波状文が描かれている。第３図１に示したように、口唇部の隆帯は、神ノ木式以来有尾式に至る間も採用されていたもので、隆帯上には棒状工具等による押圧が施されている。第３図１と遺構内での共存資料ではないが、櫛歯状工具を用いるなど、施文手法に共通性が強いことから、両者は時間的にきわめて近接した存在であると考えられる（註８）。同図４は阿久遺跡49号住居跡出土例で、口唇部に円形刺突が施される例である。この資料は第３図４との共伴関係にある。第４図２は下茂内遺跡（寺島ほか1992）出土土器で、口唇部に長楕円形の沈線文が施文されており、鳥浜貝塚にも近似した施文例がある。同図５の釈迦堂遺跡ＳＢ－06出土例は全容が明確ではないが、下茂内遺跡例と同様に、口唇部を区画した事例と考えられる。同図３は原町西遺跡（鈴木1985）１号住居跡出土土器で、欠損部分が多く詳細が定かでないが、口唇部に沈線文が施文される土器である。以上の例は、口唇部のみに隆帯や沈線が施文されるもので、沈線は隆帯の置換と想定されるが、２～４は、口唇部に沈線が垂下するものの、口縁部に施文される文様は平行沈線とコンパス文ないしは小波状文の単調な繰り返しであり、松原例のように口唇部文様帯として明瞭に区画されたものではない。松原例と酷似した区画を持つ例は、後述する東北地方南部に出土例が多い。

上記の土器群に対し、口縁部の中間に縦の区画線を有する土器がある。第４図６～９の資料がこの種の土器として挙げられる。平縁のみで波状口縁の例は存在しないようである。単沈線で２段に区画する６の三ヶ尻林遺跡（２）11号住居跡例を除くと、半截竹管による複数状の沈線で区画する例が多いようである。区画線には工具末端で施文したとみられる爪形文が加えられ、長楕円形に区画されたような印象を与えるものも多い。いずれも欠損資料が多く、区画の単位を明瞭に把握できる資料が少ないが、８の下手遺跡（小宮1996）例や７の宿下遺跡（小宮1995）15号住居跡例から推定すると、縦の区画線の単位数が４単位以上と考えられる。単位数が４単位以上である点は第３図15～17に示した肋骨文と近いようである。口縁部はコンパス文や平行沈線文によって区画されているが、このような区画を多用する資料は、第３図８～９などの黒浜式中葉に出現する縄文施文の土器に近い部分もある。口縁部文様帯を区画す



第４図　コンパス文・小波状文土器

る点は有尾式に特徴的であるが、口縁部に地文を持たない伝統がある。有尾式の衰退に反比例するように、口縁部を区画するとともに附加条縄文による羽状構成で器面を飾る土器が増加している。加えて、口縁部を区画する際に、有尾式では用いられなかったコンパス文を多用する傾向がある。一方、第４図７～９のようなコンパス文・小波状文系土器の口縁部の区画には、第３図５・６の縄文施文の土器との類似性が高いことから、第４図７～９などの例は、コンパス文・小波状文系土器のなかでも、縄文施文の土器を母体に、縄文を施文する代わりに、第４図２や５などのような口唇部の区画を意図した文様をはめ込むようにして作り上げた土器とも考えられる。このことからみると、北関東方面の第３図７・８のような縄文施文の土器に対比される土器は、大宮台地や下総台地ではコンパス文・小波状文系の第４図７～９などの土器なのであろう。第３図７が併施文として北関東で生み出された背景もこの点に求められるのではなかろうか。

これらの土器群に対し、隆帯や沈線で口縁部文様帯を貫通するように区画した例がある。第４図10～15に掲げた資料がその種の土器に相当する。12は釈迦堂遺跡SB06出土土器で、第３図２、第４図５との共伴資料である。緩い波状口縁の波頂部に隆帯が垂下し、口縁部には横位の沈線が引かれる単純な構成の土器である。北陸地方では10の小泉遺跡（松井1982）例、11の南太閤山遺跡（山本1986）例がある。南太閤山遺跡例と小泉遺跡例とを合わせ見ると、口縁部縦区画線が貫通する構成のようである。また平行線とコンパス文・小波状文が交互に施文される例が宿下遺跡81号住居跡から出土しているが、このような事例は少なく、釈迦堂遺跡例や、木津内貝塚（細田2005）６号住居跡出土例の如く、多くは平行線ないしはコンパス文のみが施文される簡素な文様構成の土器が多いようである。通常口縁部には地文を施さないが、同図13の阿久遺跡例は地文をもつ数少ない事例である。口縁部を貫通する縦区画は、甲・信・越地域の土器に多く見られ、通常は隆帯で区画されている。第４図10・11、14・15の例は隆帯を沈線に置き換えたものであると共に、第４図６～９とは区画線の系統が異なるのであろう。

第４図16～20は縦区画の要素を持たず、口縁部にコンパス文や小波状文あるいは沈線文が施文される土器である。この種の土器は奥東京湾沿岸地域から、宇輪台遺跡（丸山1993）例にみられるように、東北地方南部にかけて分布することが明らかである。

第４図18～20と第４図６の中棚遺跡例を比較すると、中棚遺跡例は、先に触れたように縄文施文土器にこの種のコンパス文・小波状文様が加えられた併施文例と見られるのである。

いままで述べたコンパス文・小波状文系土器は、下手遺跡から第４図８・14・18が出土した事例にみるように、同一段階と想定される土器群であるとともに、一見すると同じようにみられる土器も、子細にみるとそれぞれ系統関係を異にして生み出された存在ともみなすことができる。

第３図11～14は、コンパス文・小波状文系に伴うと考えられる土器群で、円形竹管の刺突が施された土器である。11は羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第２面出土土器、12は木津内貝塚５号住居跡出土土器で、後者は図示していないが、コンパス文・小波状文系土器との共伴資料である。いずれも口端に円形刺突が廻る単純な深鉢型土器である。11は４単位に隆帯が垂下し、隆帯上にも押圧が施されている。12は円形刺突下部に竹管文が施文され、さらに胴下部には格子目状沈線文が施されており、同図15の原町西貝塚例や16の木津内貝塚例、17の宿下遺跡81号住居跡出土例と同様に、追加整形施文法によるものである。このような成形法が黒浜式中葉まで残存する事例となろう。13は一風変わった構成で、口唇部を廻る円形刺突文

下には、半截竹管文による区画が施され、あたかも第３図９や第４図７等と折衷したような構成となっている。14は円形刺突文と並行沈線文を交互に施文したもので、コンパス文・小波状文を円形刺突に置き換えたような構成である。口唇部には、第５図６・７の下ノ平D遺跡（堀江1995）12号住居跡出土例に近似した隆帯が貼付されている。

黒浜式中葉には、これらの土器が有尾式に代表される大形菱形文系に取って代わられるようになる。また、奥東京湾沿岸地域ではこれらの土器を横目に見ながら、その要素のみを採用し、新たな土器を生みだしてくる。一方、周辺地域特に甲・信州方面では、コンパス文・小波状文の土器は、奥東京湾沿岸地域ほど重視されているようにはみえない。状況は北関東周辺地域でも同様であり、コンパス文・小波状文の出土例は少なく、むしろ縄文施文の土器に比重が移っているようである。

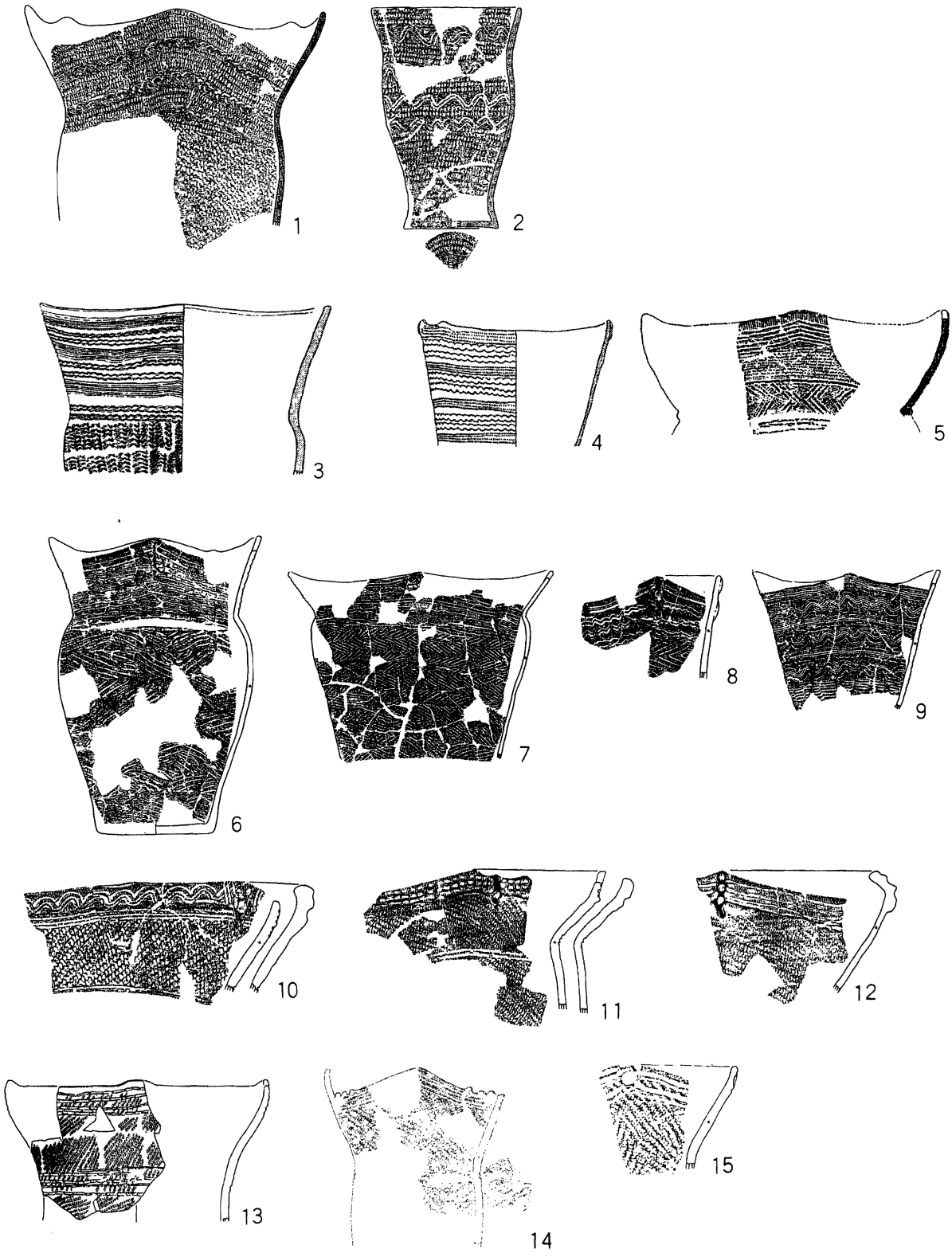
奥東京湾沿岸地域特に大宮台地から下総台地にかけては、コンパス文・小波状文系土器が定着するとともに、新たな在地土器が生み出されていた。肋骨文系がそれにあたる土器である。肋骨文系土器は器面の主に上半分に、縦沈線間を斜位の沈線で連結した単純な文様構成の土器である。器面の作り分けに起因する装飾の変更は、追加整形施文法と呼称され、繊維土器に一般的に認められる製作手法と定義されている。明瞭な事例では第３図15～17のように、文様を作り分けた後に接合する事例があり、第３図12もその一例である。黒浜中葉の特に大宮台地から下総台地で出現した肋骨文系土器は、この流れをくんでいる。加えて器面を縦に区画する要素や、縦区画間を斜位に連結する沈線の在り方には、コンパス文・小波状文系土器との、とりわけ縦区画を伴う第４図13～14のような土器との関わりが大きいように思われる。沈線文化に際しては、羽状縄文の土器を参照し、施文方向の変換点を縦位に、条の傾斜方向を斜位の沈線に置換することによって生み出された土器なのであろう。また、肋骨文は周辺地域ではその存在が認められず、コンパス文・小波状文が卓越する大宮台地から下総台地で普及している点も成立の背景を物語っているだろう。

3　東北地方南部の変容

東北地方南部と信州方面は、関山Ⅱ式中葉頃に関係性が強まった点については既に指摘した。それではこの関係性の深化は一体いつ頃まで続いたのだろうか。

コンパス文・小波状文系土器については、日本海側の新潟方面を含む東北地方において関山Ⅰ式並行期からの系統的な脈絡がたどれる部分が多い。しかし、従来の基準となっている奥東京湾沿岸地域での関山Ⅱ式以降の関係については、土器の隔たりが大きいことや、共存関係に乏しいことから地域間の並行関係を辿ることが難しい。越田和遺跡（福島1996）例と胄宮西遺跡（芳賀1984）例との関係については、芳賀英一氏の指摘（芳賀・上村1997）があり、この見解を受ける形で、関東と相互の編年的位置関係について、堀江格氏は、関山Ⅱ式前葉に獅子内遺跡182号住居跡を、中葉に第５図１～２の越田和遺跡第Ⅷ層を、後葉にいわゆる相互刺突文系土器を位置付けた（堀江2006）。筆者も概ね氏の見解に従っているが、依然として大木２ａ式の編年的位置関係が不安定である。

大木２ａ式は胄宮西遺跡の報告者である芳賀英一氏により、既に新旧２段階に細分されている。このなかで古段階とされた資料には、第５図３・４のように、半截竹管や櫛歯状工具による平行沈線文や刺突文、コンパス文が施文されるとともに、３に見られるように側面環付・閉端環付原体が多用されていることが明らかになった。ここで越田和遺跡第Ⅷ層の資料を見るとコンパス文・小波状文系土器には半截竹管による連続刺突文とコンパス文が施文され、連続刺突文を沈線化すれば、胄宮西遺跡と近似した資料であることがわかる（註



第５図　東北地方南部の変遷

９)。胄宮西遺跡では関山系の土器が出土していないため、位置付けに苦慮するが、信州方面の土器を介在させて、第１図１～３の交差菱形文土器群と、第２図１の４単位鋸歯文の土器を関山Ⅱ式中葉に位置付けるとともに、第５図１・２の越田和遺跡第Ⅷ層のコンパス文・小波状文系土器や獅子内遺跡Ⅲ区Ｊ12号住居跡出土土器を並行させ、関山Ⅱ式後葉に胄宮西遺跡の大木２ａ式古段階と相互刺突文土器を並行関係にあるものと捉えることにより、不安定であった大木２ａ式の古い部分の位置が定まり、編年上の齟齬がとりあえずは解消できるように思われる（註10)。

それでは、黒浜式前葉以降にはどのような土器群が置かれるのだろうか、下ノ平Ｄ遺跡12号住居跡出土の一括資料には、第５図６・７の口縁部が外反する深鉢形土器や、同図８・９の直線的に開く深鉢形土器があり、前者には波頂部にＪ字状や環状の隆帯が貼付されている。口縁部には並行沈線やコンパス文が施文され、胴部は絡条帯による羽状ないしは菱形施文である。後者には棒状の隆帯が施文される８と、平行沈線と小波状文が交互に施文され、胴下部に絡条帯が施文される９がある。これらの資料と関東との直接的な対比は難しいが、植房貝塚（西村1957）出土土器の一部と近似した部分があることから、黒浜式前葉に平行するものと想定しておく。下ノ平Ｄ遺跡では、12号住居跡と重複する69号土壙からも同じような土器が出土している。

東北地方南部では、このような土器群に後続して、第５図10～12に示した宇輪台遺跡５号住居跡出土土器のように、口縁部が外反し、隆線で区画された幅狭い口唇部に小波状文や刺突列、沈線が廻るとともに、波頂部から隆帯が垂下する土器が主体となるようである。口唇部を除く器面には縄文が施されることが一般的だが、単方向斜縄文が多いようである。このような土器に加え、大木２ａ式の古い段階からの系譜を引く第４図19や、奥東京湾地域に主体となる第４図９などが伴うことが、この段階の特徴なのではなかろうか。

縄文施文の土器が主体となるとともに、従来とは様相が大きく変わることが指摘されて（丸山1993）いる。以上の比較をもとに、ここでは、下ノ平Ｄ遺跡12号住居跡を黒浜式前葉に、宇輪台遺跡５号住居跡出土土器を黒浜式中葉に並行するものと捉えておきたい。

東北地方南部では、第６図５～８に示したような奥東京湾沿岸地域に主体的な、附加条施文の土器が見られないことから、大木２ａ式以来の土器を大きく変える要因となったのは、奥東京湾沿岸地域というよりはむしろ、北関東にみられる縄文施文の土器群からの影響なのかもしれない。

これに反し、奥東京湾沿岸地域や周辺地域でコンパス文・小波状文系土器が用いられる背景には、東北地方南部からの影響が存在した可能性が高いように考えられる。口唇部に貼付される隆帯は、甲・信州方面では押圧や刻みが施され、同様の在り方は東北地方南部にも存在する。両地域の関係は明らかではないが、コンパス文の浸透に際して北関東を経由した影響が存在したのであろうか。一方、大宮台地や下総台地一帯では、隆帯を沈線に置き換えるとともに、第４図６～９のようなこの地域に特有の土器を生みだし、それが第４図９のように周辺地域に波及したと捉えることができるのではないだろうか。

コンパス文・小波状文系土器は東北地方の関山Ⅰ式並行期に遡り、関山Ⅱ式後葉並行期に刺突文から沈線文で文様が描かれるようになるとともに、黒浜式前葉平行期には安定して存在するが、中葉平行期に次第に減少してくるものと想定される。この時期の奥東京湾沿岸地域や周辺地域の土器を見ても、コンパス文・小波状文系土器の存在は不明瞭である。黒浜式中葉に、特に大宮台地から下総台地を中心に、甲・信州方面でも採用される傾向がうかがえる。第４図５～７などの資料は、有

文土器の欠落を補うべく文様要素を東北地方南部から、文様帯の配置や区画の要素を周辺地域から取り入れ、大宮台地から下総台地市一帯で生成された可能性を考えておきたい。このようにみると、関山式中葉から後葉にかけて、特に信州から北関東方面では、恐らく日本海側を経由して、あたかも奥東京湾沿岸地域を取り囲むような、強い関係性が認められるが、黒浜式中葉期には東北地方南部から奥東京湾沿岸地域を経由した周辺地域との関係性が認められる。このことを契機に、それまで大形菱形文系と関山系という土器群の系統に根差した地域性が解消される方向に向かっていったものと考えられる。

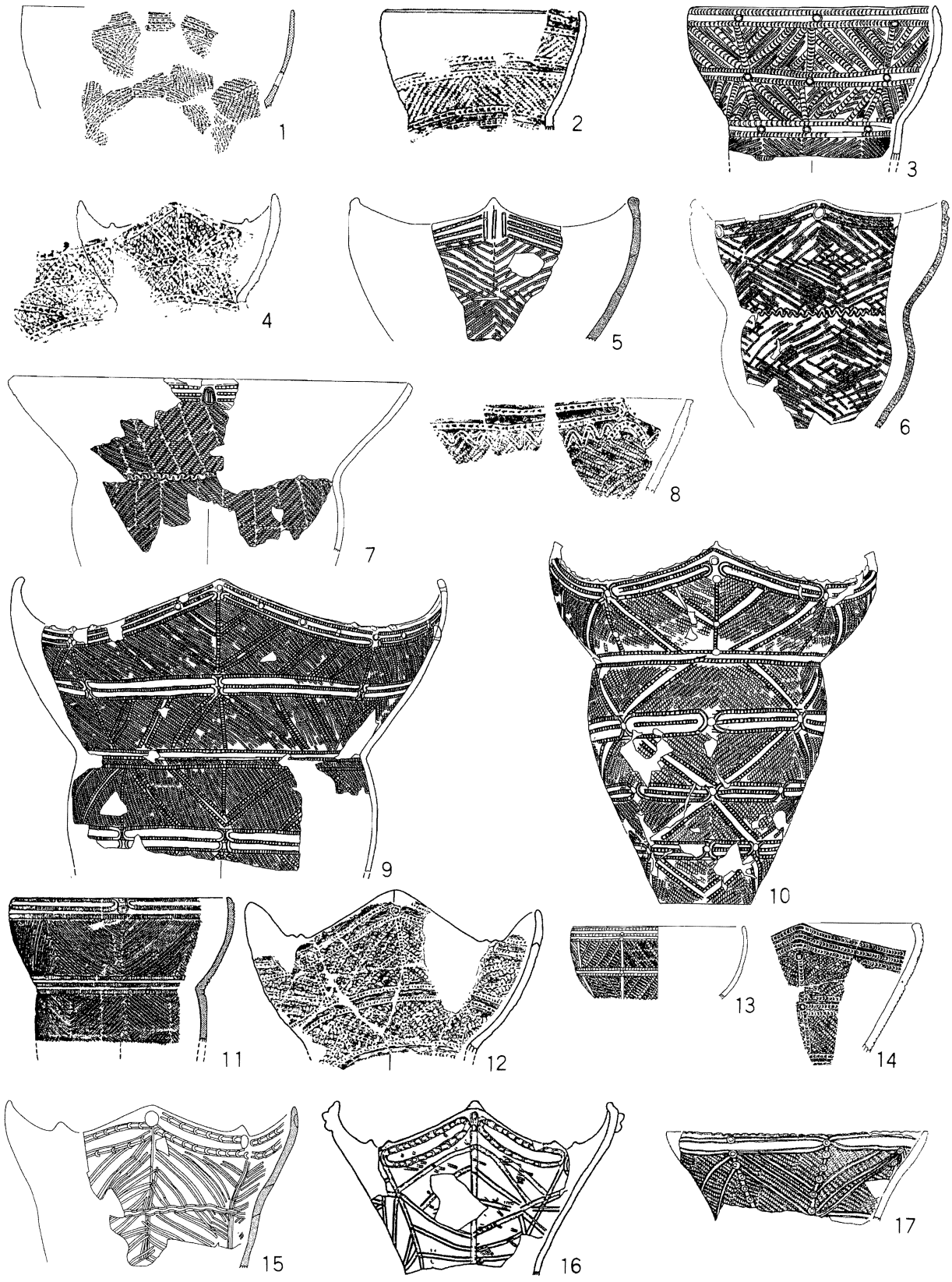
4　地域性の解消

黒浜式中葉には、奥東京湾沿岸地域での有文土器の欠落を補うように、コンパス文・小波状文系土器が生成された経緯があった。またこの現象の背景には、有尾式の衰退も絡んでおり、特に北関東地域ではコンパス文・小波状文系土器に対比される区画を有する縄文施文の土器が採用されることとなった。本来、自らの地域ではない土器を相互に参照することで生み出されたものである点は重要で、このような背景を持って黒浜式後葉の土器群が成立するわけである。

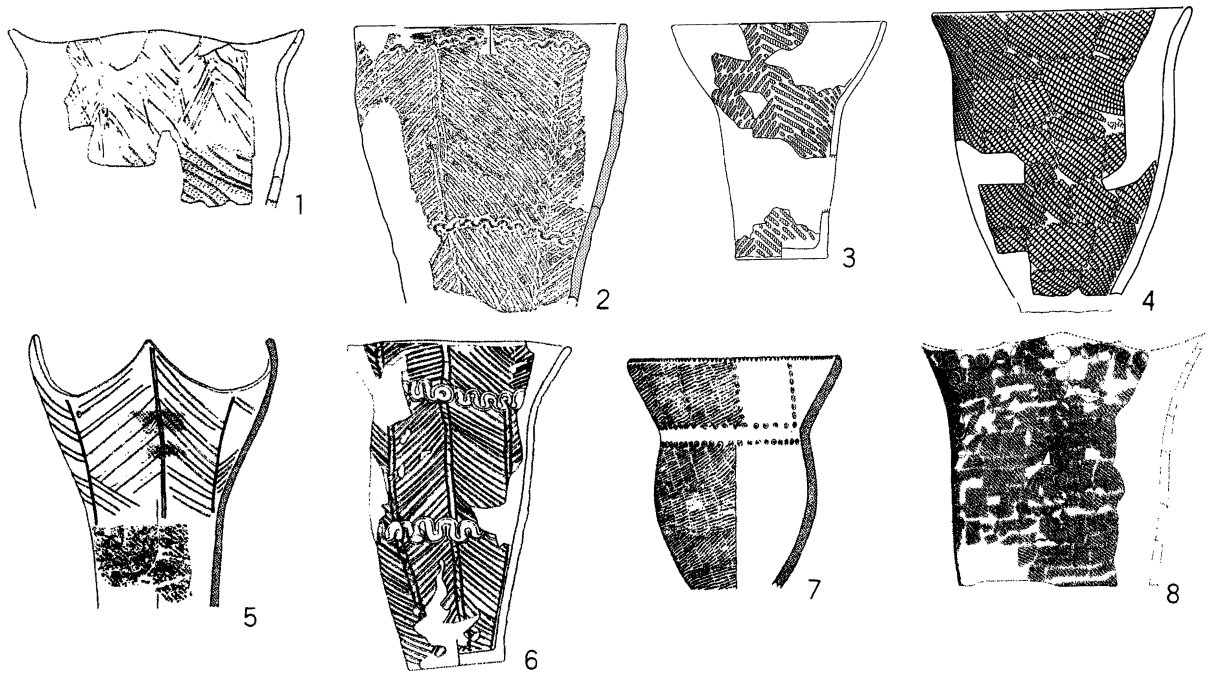
第７図に黒浜式後葉の土器群を示した。田中和之氏は黒浜式後葉－黒浜３式－を新旧２分している。小宮雪晴氏は第６図１～６を黒浜式中葉－黒浜２式－新段階に、第７図９～16を黒浜式後葉－黒浜３式－と捉えた。筆者は黒浜式中葉の問題とも関連するが、コンパス文・小波状文系土器には縄文施文の土器と関係する部分があるとともに、縦区画を有する土器には有尾式と関与し、肋骨文を生み出す素地を形成するとの認識をもとに、中葉を大きく１段階ととらえている。これらの延長線上に組み合わせ鋸歯文が生み出され変容するわけである。ところで、筆者は第６図に示した資料を、かつて大きく１段階ととらえていた（細田2002）。しかし分析を進めた結果、黒浜式中葉に引き起こされた土器群の変容を契機に、地域性が解消されてゆく経緯を考え、新旧に区分すべきと認識するに至った。

第６図１～８はいわゆる組み合わせ鋸歯文の古相を示す土器である。３の糸井宮前遺跡（関根1986）100号住居跡出土例は、２条の竹管文によって二帯に区分され、附加条縄文地上に、条と方向を同じくする竹管文が施された土器である。図示していないが、中棚遺跡ＮＪ１号住居跡出土土器がこの段階の典型例として取り上げられている。このような典型例がある一方で、１の釈迦堂遺跡ＳＢ09号住居跡からは、口唇部と口頸部に竹管文が施文され、口縁部が縄文のみで竹管での施文がなされない土器がある。縄文施文は口縁部内で原体を異にする羽状施文が施されており、明らかに古手の様相を示している。２は中棚遺跡ＮＪＰ23出土例で、口縁部の並行する竹管文間が磨り消されている点は糸井宮前遺跡例と共通するが、糸井宮前遺跡例から条方向に沿った竹管を除いた土器ともいえる。４は羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第２面からの出土例で、単方向地文上に縦区画と斜行する竹管文が施文されている。同図９に先行するとともに、８に近い段階であろう。７は徳力東北遺跡（細田2005）11号住居跡出土例で、前２者と地域は異なり、附加条第１種原体による羽状縄文が施文された一例である。このほか、北関東では竹管文をもたない縄文施文の土器が出土しており、黒浜式中葉の第３図８・９に近い様相を持っている。このことから、糸井宮前遺跡出土土器のように、竹管文を有する土器がこの段階のすべてではないことがわかる。

第６図５・６・８は撚りの異なる附加条第１種の原体による羽状施文の土器群である。特に５・６は撚りの太い縄を絡げることにより間隔をあけた施文を意図しており、あたかも竹管文のような



第6図　組み合わせ鋸歯文の土器



第７図　組み合わせ鋸歯文の伴出土器

印象を与えている。通常、附加縄で施文される土器には口縁部と胴部との境界にコンパス文が施文されることが多く、口縁部に縦や横の区画が加えられる例は少ない。８は羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第１面から出土したもので、天神前遺跡出土例に酷似する資料として報告されている（戸田2003）。

周辺地域で出土する土器群では、口縁部に第６図１・４のような円形刺突と竹管文による区画が施されており、コンパス文を用いる例は少ないようである。これに対し、奥東京湾沿岸地域では、口唇部に円形刺突と竹管文を用いるほか、５のような縦の沈線と竹管文が用いられ、口縁部と胴部の境界にコンパス文が施文される例が多い。

第７図１～４は、後葉でも古い段階の資料である。１・２は肋骨文で、２は全面施文例である。３は縄文施文の深鉢で、２の全面施文肋骨文が縄文施文土器をベースにしていることがわかる。ところで、天神前遺跡を報告した田中氏は、黒浜式後葉－３式－古段階に繊維を含まない土器が出現していることに注目した。第７図４がその一例である。主体となる繊維土器に対して、特に大宮台地や下総台地では、この段階に無繊維土器が出現している状況が明確となった。しかし、無繊維土器は縄文施文のみの粗製土器に限られ、有文土器には存在しないようである。また、縄文施文においては羽状縄文ではなく、単方向斜縄文に限定されているようである。この問題を考えるにあたり、釈迦堂遺跡は大きなヒントを与えてくれる。

第６図１は釈迦堂遺跡出土土器で、繊維を含んでいる。また、附加条縄文が施文された土器は出土しておらず、現在までのところ、竹管文が施文されない縄文施文の土器に限定されているようである。ところで、羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区からは、第６図５と天神前遺跡出土土器に酷似した同図９が出土している。釈迦堂遺跡では、粗製土器が無繊維で単方向斜縄文である。また、羽根尾貝塚では少量の繊維土器を含むが、無繊維土器が主体になるようである。器形も口唇端部が外反する深鉢で、第７図４に近い。これらの様相からみると、一方では繊維を含む有文土器が周辺地域に、他方では粗製の無繊維土器が奥東京湾沿岸地域、

なかんずく大宮台地や下総台地にもたらされるという、土器製作技法と、器面の装飾に関して双方向のやりとりが存在したと推定される。

黒浜式後葉古段階は、多分に中葉段階の様相をひいていたことは、縄文施文土器が北関東や甲・信州方面に多いことからも推測できる。しかし大宮台地や下総台地では状況が異なり、むしろ附加条縄文による施文に収斂している。黒浜式中葉では特に北関東域で附加条縄文が増加する傾向にあり、後葉で、単節縄文の施文が顕著となる。大宮台地や下総台地では逆に、あたかも竹管文のような効果を思わせる附加条縄文に収斂している。このようにみると、糸井宮前遺跡100号住居跡例のように、竹管文を施文する土器は、多分に附加条縄文の土器を意識した結果とも考えられる。

このように、黒浜式後葉古段階では地域性が比較的明瞭であったが、後葉新段階になると、殊に有文土器においては地域性が薄れ、共通性の意強い土器が現われてくる。

第６図９～16は、組み合わせ鋸歯文の新相を示す資料である。10は天神前遺跡55号土壙出土例、９は羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第１面の出土例である。いずれも４単位波状口縁で、口唇部に刺突文を挟んで竹管文が廻り、10は口縁部が１帯、９は２帯に区画されている。また胴部にも長楕円形の区画文を持ち10では４帯に区画されている。10は縦区画が口縁部のみにもられ、斜行する竹管文間や横位の区画線間に磨り消しが施される。９は口縁部と胴部が縦区画されるが、磨り消しは横位の区画線間に限定されており、細部には相違もあるが、もっとも精緻なつくりの土器であろう。12の糸井宮前遺跡118号住居跡出土土器は羽根尾貝塚例に酷似した資料であろう。これらの土器が出現するに到り、附加条縄文の土器は姿を消し、基本的には縄文地上に竹管文が施文される土器が主役となった。下総台地の諸遺跡では、破片資料が多いが、磨り消しを有する典型例とも言える資料の報告例がある。このように関東全域のみならず、第６図14の宇輪台遺跡や弘源寺貝塚、冑宮西遺跡でも出土例があるように、東北地方南部にも分布を広げるに到った。大宮台地や下総台地では、これらの資料に伴い、肋骨文系と融合したような第６図15・17などの資料も出土している。また、この段階では第６図16のように有文土器の無繊維化も急速に進行しつつあったことが、天神前遺跡の分析からも明らかである。

黒浜式後葉の土器群は、地域性を排するように、「米」字文に収斂する段階であったと考えられる。このような共通する土器群を介し急速に進む無繊維土器の広がりが、来るべき諸磯ａ式成立の地盤であったことは疑いえないであろう。

5　収束

いささか急ぎ足で関山Ⅱ式から黒浜式の土器変遷を通覧した。関東を支点に周辺地域を眺めると、周辺地域と相互にかかわりあうなかで変化する部分と、伝統を重視する部分とがあり、それらは遺跡の置かれた地理的環境とともに、恐らくは社会的な環境をも反映していると考えられる。関山Ⅱ式から黒浜式前葉にかけては、東北地方南部との関係性を強めた、ここでいう周辺地域－長野県から群馬県などの北関東一帯－と、大宮台地や下総台地、武蔵野台地のいわゆる奥東京湾沿岸地域にみられる伝統を重視する地域とのいわば拮抗した関係が垣間見えてくる。この地域では、黒浜式中葉にいたると、殊に有文土器に関しては関山式の伝統が廃れ、他地域、他系統の土器を採用し自らの組成に取り入れることに新たな活路を見出したように思われる。一方周辺地域では、有尾式の伝統が廃れつつあったためか、奥東京湾沿岸地域の土器の要素をも取り入れつつ土器の主役を縄文施文に交代させる動きがあったようである。このような状況の下で、やがて奥東京湾沿岸地域では、附加条縄文による菱形構成を生み出すに到り、周

辺地域でもこれに対抗するように竹管文施文の土器を生成させた。このように、背後には土器情報が交換されはするが、地域で異なった土器を志向する状況が存在したのであろう。しかし黒浜式後葉の新段階にいたり、組み合わせ鋸歯文が確立するとともに地域性が解消される状況が生じた。諸磯a式古段階から新段階に至り、関東はもとより中部地方にまで広範な分布を広げた背景には、このような状況が存在したことは確実であろう。繊維土器から無繊維土器への変遷も、土器情報にともない、技術的な情報が交換されたことが要因であろう。

このように、関山II式から黒浜式にかけての土器変遷からは、地域がどのように伝統を保持したのか、伝統の衰退に対してはどのように対処したのか、具体的な様相を窺うことができるのである。ここで示した奥東京湾沿岸地域や周辺地域の区分は概念的にすぎず、個々の遺跡や遺構レベルに戻れば状況が複雑であることは十分承知している。しかしながら、マクロな視点で眺めることによって、新たな視点が開けるとの見通しのもとに、敢えてこのような考察を行った次第である。

本稿を奏するにあたり、奥野麦生、金子直行、小宮雪晴、鈴木徳雄、田中和之、谷藤保彦、関根慎二、贄田明、堀江格、各氏からご助言を賜った。厚く御礼を申し上げる次第である。

註

1、筆者は関山II式中葉に神ノ木式が並行し、その系統や東北地方南部と関係する大形菱形文系土器の成立期を関山II式終末－井沼方段階－に位置付けている。北関東では、関山II式中葉以降に、奥東京湾沿岸地域と同様な変遷をたどる地域と、大形菱形文系が分布する地域とがあり、両者は基本的に共存しないようである。奥東京湾沿岸地域では、黒浜式古段階が井沼方段階に後続するが、大形菱形文系を黒浜式古段階並行とすると、ずれが生じることは明らかである。

2、谷藤氏は関山II式を、黒坂氏の貝崎５・６段階を１段階ととらえ、関山IIａ式に、井沼方段階を関山IIｂ式ととらえている。筆者は東北地方南部を視野に検討する中で、関山II式を３段階に区分した。

3、新潟県の関山並行期については、二軒茶屋遺跡や新谷遺跡出土の爪形・列点刺突文土器を関山Ｉ式に対比させる斉藤準氏の見解(斉藤2006)に従った。

4、東北地方南部の中通り地域一帯では、奥東京湾沿岸地域とは様相を異にする、例えば第１図５などの関山式土器が多いように思われる。また塩喰洞窟で出土した片口注口には、羽根尾貝塚３Ｃ区１号貝層出土土器のように大波状口縁の土器がある。関山II式中葉に大波状口縁が発達する背景には、東北地方南部との間接的な結びつきがあるように思われる。

5、中越遺跡２号住居跡からは、第５図１・２に類似し、櫛歯状工具で列点文やコンパス文を施文した土器が出土している。このような土器も、もとを辿れば東北地方南部との関係性から生み出されたものであろう。神ノ木式土器の組成は、在地の中越式と東北地方南部に系統関係を持つ土器および束の縄に見られるように、関山式に関連する要素から成り立っている。

6、神ノ木式からの系統を有尾式に、主に北関東に分布する含繊維の土器を見立式とする見解があるが、繊維含有の有無で型式を区分することは難しい。ここでは、４単位菱形構成の土器を、広義の有尾式として扱った。

7、土器型式と集団との関係は曖昧模糊としている。今回対象とした時期では、特に有文深鉢形土器の分布域が地域性を象徴し、奥東京湾沿岸地域に代表されるように、生業とも密接な関連があるかに見える。これに対して、土器の系統関係からは、生業を超えた社会関係が透けて見えるように思われる。

8、この問題については、文様帯や文様構成との関連性を追求した金子直行氏の詳細な研究（金子1989）がある。

9、神ノ木式には、口唇部への隆帯とともに、口縁部には端部が環状となる隆帯が貼付される例が多い。地域は異なるが、大木2ａ式にもしばしば似

たような隆帯が認められる。このような大木２ａ式は黒浜式並行と考えられるが、出自が明瞭ではない。神ノ木式と大木式との関連性を考えると、隆帯の期限が神ノ木式と考えることもあながち無理な想定とも言えないと思われる。

10、中越遺跡２号住居跡からは、神ノ木式や関山Ⅱ式的な突起をもつ土器とともに、櫛歯状工具によるコンパス文と連続刺突文が交互に施文された土器が出土している。このような土器は信州方面で系統的な脈絡が辿れないので、東北地方南部との交渉関係でもたらされた土器と考えるべきであろう。

11　大木１式を関山式、大木２ａ式を黒浜式に並行させると、関山Ⅱ式後葉並行の土器が相互刺突文土器のみとなり、越田和Ⅷ層との連続性が断たれてしまう。大木２ａ式の古い部分に多様される側面環付・閉端環付原体が、関山Ⅱ式中葉に広がった組紐の変容とすれば、この地域で組紐が多用される前段階からの系譜を辿ることが可能となる。同様に、有尾式を黒浜並行期とすると、関山Ⅱ式中葉に平行する神ノ木式と有尾式とに断絶が生じることとなる。関東と周辺地域とで、土器の系統と変遷過程が異なるための齟齬が生じることとなる。

挿図出典遺跡・遺構

第１図

１越田和遺跡Ⅷ層、２宮田貝塚、３南太閤山遺跡、４草山遺跡、５塚田遺跡Ｊ12号住居跡、宮西遺跡270号住居跡、７中越遺跡２号住居跡、８幸田貝塚414号住居跡、９羽根尾貝塚３Ｃ区１号貝層、10後山遺跡２号住居跡、11幸田貝塚455号住居跡、12・13・14井沼方遺跡５区１号住居跡、15・17・18宿上貝塚３号住居跡、16大谷場貝塚

第２図

１松原遺跡、２宮田貝塚、３野村遺跡35号住居跡、４若葉台遺跡001号住居跡、５三枚町遺跡Ｊ１号住居跡、６井沼方遺跡７号住居跡、７地蔵田Ｂ遺跡７号土壙、８船入島貝塚、９城之腰遺跡１号住居跡、10羽根尾貝塚３Ｃ区１号貝層、11上ノ坊、12三後沢遺跡Ｊ５号住居跡、13南大塚遺跡１号住居跡、14有尾遺跡、15中矢下遺跡Ａ区２号住居跡

第３図

１松原遺跡、２釈迦堂遺跡ＳＢ－06、３・７・10中棚遺跡ＮＪ12号住居跡、４阿久遺跡49号住居跡、５・９三ケ尻林（２）遺跡９号住居跡、６・８三ケ尻林（２）遺跡８号住居跡、11羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第２面、12木津内貝塚５号住居跡、13阿久遺跡74号住居跡、14横倉宮ノ内遺跡２区ＳＩ040、15原町西遺跡１号住居跡、16木津内貝塚６号住居跡、17宿下遺跡81号住居跡、18飯塚遺跡26号住居跡

第４図

１松原遺跡ＳＱ8002、２下茂内遺跡、３原町西遺跡１号住居跡、４阿久遺跡49号住居跡、５・12釈迦堂遺跡ＳＢ－06、６三ケ尻林（２）遺跡11号住居跡、７宿下遺跡15号住居跡、８・14・18下手遺跡、９宇輪台遺跡５号住居跡、10小泉遺跡、11南太閤山遺跡、15飯塚遺跡26号住居跡、16・17阿久遺跡33号住居跡、19宇輪台遺跡４号住居跡、20羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第２面

第５図

１・２越田和遺跡遺構外Ⅷ層、３・４胄宮西遺跡、５下平石遺跡、６・７・８・９下ノ平Ｄ遺跡12号住居跡、10・11・12宇輪台遺跡５号住居跡、13弘源寺遺跡、14宇輪台遺跡、15下ノ平Ｄ遺跡

第６図

１釈迦堂遺跡ＳＢ－39、２中棚遺跡ＮＪＰ23、３糸井宮前遺跡100号住居跡、４羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第２面、５天神前遺跡18号住居跡、６本郷貝塚第２地点４号住居跡、７徳力東北遺跡11号住居跡、８羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第１面、９羽根尾貝塚３Ｃ区遺物集中区第１面、10天神前遺跡55号土壙、11阿久遺跡76号住居跡、12糸井宮前遺跡118号住居跡、13稲荷山遺跡24号住居跡、14宇輪台遺跡、15・17天神前遺跡２号住居跡、16花前Ｉ遺跡008号住居跡

第７図

１花前Ｉ遺跡118号住居跡、２宿下遺跡６号住居跡、３徳力東北遺跡15・16号住居跡、４天神前遺跡５号住居跡、５飯山満東遺跡１号住居跡、６天神前遺跡１号住居跡、７飯山満東遺跡８号住居跡、８天神前遺跡２号住居跡

参考文献

新井和之　1982 「黒浜式土器」『縄文文化の研究』第３巻　雄山閣

市川　修　1983 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集

今村啓爾　1992 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』第３巻　雄山閣

上田典男ほか　1998 「松原遺跡　縄文時代」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４』 財団法人長野県埋蔵文化財センター

江坂輝弥　1961 「縄文文化について」『歴史評論』31

大塚広住　1975 『幸田貝塚　第５次（昭和50年度）調査概報』松戸市文化財調査小報８

大塚広住　1985 『幸田貝塚（第11次調査）・東平賀貝塚（第４次調査）』松戸市文化財調査報告第12集

大宮市　1961 「下手遺跡」『大宮市史』第１巻

奥田正彦　1989 『関宿町飯塚貝塚』千葉県文化財センター報告書第156集

小倉　均　1981 『大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第15集

小倉　均　1983 『井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第32集

奥野麦生　1982 「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号　土曜考古学研究会

奥野麦生　1999 「本郷貝塚第２地点４号住居跡」「米島貝塚」『埼葛の縄文前期』 埼葛地域文化財担当者会

小野正文　1986 『釈迦堂Ⅰ』山梨県文化財センター調査報告17集

柿沼恵介　1986 『分郷八崎遺跡』 群馬県北橘村教育委員会

笠井崇吉　1997 『飛鳥山遺跡Ⅱ』 北区教育委員会

亀田幸久ほか　1995 『横倉宮ノ内遺跡』 財団法人文化振興事業団

金山喜昭　1987 『千葉県野田市槙ノ内遺跡』 遺跡調査報告第５冊　野田市遺跡調査会

金子直行　1986 『中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヲネ・後山北谷・滝尾塚』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第57集

金子直行　1989 「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」『埼玉考古』第25号　埼玉考古学会

金子直行ほか　1990 「シンポジウム　大木、有尾、そして黒浜－縄文前期中葉土器群に見る系統と交流の実態－」『埼玉考古　別冊３』埼玉考古学会

金子直行　2006 「宮西遺跡」『岡部町史』原始・古代資料編　深谷市教育委員会

菊池　実　1986 『三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

黒坂禎二　1984 『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第10集

黒坂禎二　1989 「羽状縄文系土器の文様構成（点描）－１」『研究紀要』第６号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒坂禎二　2006 「二ツ木・関山式土器の変容と細分史」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会

小川　出　1986 『今熊野遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第114集　宮城県教育委員会

小杉　康　1997 「南関東の様相」『第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」資料集』縄文セミナーの会

小林達雄　1965 『米島貝塚』 庄和町文化財調査報告第１集

古内　茂　1974 『柏市鴻巣遺跡』 財団法人千葉県都市公社

小山岳夫　1994 『塚田遺跡』 御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

小宮雪晴　1985 『宿下遺跡　第18地点』 蓮田市文化財調査報告書第25集

小宮雪晴　1994 「黒浜式土器の構成と展開に関する一考察」『埼葛地域文化の研究』埼葛地区文化財担当者会

斉藤　準　2006 「新潟県における縄文前期前葉の土器群について」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会

佐藤忠雄　1983 『西浦北・宮西』 岡部町教育委員会

佐藤典邦　1986 『弘源寺貝塚』福島県いわき市教育委員会

佐藤春生　1998 『松の外遺跡・西戸古墳群』 毛呂山町埋蔵文化財調査報告第17集
渋谷昌彦　2001 「関東・中部・北陸地方の大木２ａ式土器の研究－土器型式から見た周辺地域との交流－」『縄文時代』12　縄文時代文化研究会
渋谷昌彦　2006 「東日本で出土する近畿・東海・中部の土器型式」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会
島村　薫ほか　2002 『木津内貝塚・向山遺跡』 杉戸町文化財調査報告第６集
下平博之・贄田　明　1997 「長野県の様相」『第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」資料集』縄文セミナーの会
庄野靖寿　1984 『尾ヶ崎遺跡』 埼玉県庄和町尾ヶ崎遺跡調査会
鈴鹿良一　1997 『獅子内遺跡（第２次調査）』摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅳ　福島県文化センター
鈴木素行　1985 『原町西貝塚発掘調査報告書』古河市史資料第９集　原町西貝塚調査団　古河市史編さん委員会原始古代部会
鈴木徳雄　1994 「諸磯ａ式の文様帯と施文域」『縄文時代』第５号　縄文時代文化研究会
清藤一順　1975 『飯山満東遺跡』 千葉県房総考古資料刊行会
関根慎二　1986 『糸井宮前Ⅱ』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
千田茂雄・関根慎二　2001 「野村遺跡（前期）」『安中市史』第４巻原始古代中世資料編
竹島国基　1975 『宮田貝塚』 小高町教育委員会
田中和之　1991 『天神前遺跡』 蓮田市文化財調査報告書第17集
田中和之・小宮雪晴　2005 『宿浦遺跡・宿上遺跡・天神前遺跡・宿下遺跡』 蓮田市文化財調査報告書　第40集
田中和之　1990 「縄文前期中葉の土器群の問題点～「組み合わせ鋸歯文状」文土器群の成立と展開を中心として」『埼玉考古』第27号
田中和之　2006 「羽状縄文系土器」『縄文土器総覧』 アムプロモーション
谷口康浩　1999 『志村遺跡第６地点発掘調査報告書』 凸版印刷工場内遺跡調査会
谷藤保彦　1997 「北関東の様相」『第10回　縄文セミナー 「前期中葉の諸様相」資料集』縄文セミナーの会
谷藤保彦　2006 「二ツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土器」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会
角田文衛　1936 「陸前船入島貝塚の研究」『考古論叢』第３輯
寺崎裕助　1997 「新潟県の様相」『第10回　縄文セミナー 「前期中葉の諸様相」資料集』縄文セミナーの会
寺島俊朗ほか　1992 「下茂内遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書１』 財団法人長野県埋蔵文化財センター
戸田哲也　1988 『三枚町遺跡発掘調査報告書』 県営三枚町団地予定地内遺跡発掘調査団
戸田哲也　2002 『羽根尾貝塚』 玉川文化財研究所
戸田哲也　2007 『万田貝殻坂貝塚（万田遺跡第９地点）発掘調査報告書　多摩川文化財研究所
富沢敏弘　1985 『中棚遺跡・長井城跡』 群馬県昭和村教育委員会　群馬県教育委員会
友野良一　1990 『中越井関発掘調査報告書』 宮田村教育委員会
中山雅弘　1989 『下平石遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第22冊　いわき市教育文化事業団
西村正衛　1957 「千葉県香取郡植房貝塚出土土器」『学術研究』６　早稲田大学教育学部
贄田　明　2006 「長野県における縄文前期前葉土器群」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会
野中松夫　1983 『江ヶ崎貝塚』 蓮田市文化財調査報告書　第５集
芳賀英一　1984 『胄宮西遺跡』 会津高田町文化財調査報告書第５集
芳賀英一・植村泰徳　1997 「福島県の様相」『第10回　縄文セミナー 「前期中葉の諸様相」資料集』縄文セミナーの会
秦　昭繁　1977 『松原』 置賜考古学会

羽生淳子　1983 『稲荷丸北遺跡』 ニューサイエンス社
樋口昇一　1976 「十二ノ后遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市・その４－』 長野県教育委員会
昼間孝志　1984 『三ヶ尻林（２）・台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第34集
福島雅儀　1996 『越田和遺跡　柴原Ａ遺跡』 福島県文化財調査報告書第322集　福島県文化センター
細田　勝　2002 「諸磯式土器の変遷過程」『研究紀要』第17号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
細田　勝　2005 『徳力東北遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第309集
細田　勝　2006 「関山Ⅱ式土器について」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会
堀江　格　1995 『下ノ平Ｄ遺跡　弓手原Ａ遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第77集　福島市教育委員会
堀江　格　2006 「東北地方の様相」『第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」資料集』 縄文セミナーの会
堀越正行　1988ａ 「市川市中台貝塚出土土器の再吟味」『ＭＵＳＥＵＭ千葉』第19号　千葉県博物館協会
堀越正行　1988ｂ 「水子式土器考」『史館』第20号　史館同人
本田秀生　1997 「北陸の様相」『第10回　縄文セミナー「前期中葉の諸様相」資料集』 縄文セミナーの会
増田正博　1974 『上尾市後山遺跡』 上尾市教育委員会
松井正信　1982 『小泉遺跡』 大門町教育委員会
丸山泰徳　1993 『宇輪台遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第58集　福島市教育委員会
三友国五郎ほか　1958 『大谷場貝塚』 南浦和地区埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
宮田　毅　1981 『大塚・間之原遺跡確認調査の概要』 太田市教育委員会
百瀬新治　1982 「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村・その５－』 長野県教育委員会
安田　稔　1983 『地蔵田Ｂ遺跡』福島県文化財調査報告書第115集　福島県文化財センター
山本正敏　1986 『都市計画道路　七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（４）』 富山県教育委員会
柳川靖彦　1976 『草山遺跡』神奈川県文化財調査報告書11
吉田　浩ほか　1991 『居木橋遺跡３（Ｂ・Ｄ地区）』品川区埋蔵文化財調査報告書　品川区遺跡調査会
若槻省吾　1980 『笠懸村稲荷山遺跡』笠懸村埋蔵文化財調査報告書　第３集

設立30周年記念

研究紀要 第25号

2011

平成23年３月14日　印　刷
平成23年３月24日　発　行

発　行　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台四丁目４番地１
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955

印　刷　株式会社文化新聞社